

子育て公園

子どもたちがみえてくる 親にひらかれた「学年通信」

編集部

少子化の家族の時代です。地域にはかつてのように子どもが群れをなして遊んでいません。今たくさんの子どもをみていてその時代の子どものたちの特徴的な様子がよくみえる場所の一つが学校・園です。「わが子はどんなしているのかな?・ほかの子はどうなんだろう?お便りください先生!」は親のせつなる願いです。そんな親の気持ちに答えてくださっている素敵な学校の学年通信『にこにこどんどん』を紹介します。

この通信の送り手は江南小学校一年生学年主任高橋武昌さんです。

新しくこの学校に赴任して二年目になります。新潟県民間教育研究団体「新潟県教育研究協議会」の会長さんとしていろいろな研究サークルに集う若い先生を励ましています。

「学ぶ」意欲を引き出そう

高橋さんは「今こそ教師が力量を発揮する時だ。詰め込みのカリキュラムが現場に押しつけられ、先生方がそれを無理して教え込むことに限界がきている。子どもは授業の中で討論ができたり、友達や教師と対話ができることを強く望んでいる。科学的で系統性をもつ精選した教材を整え、子どもたちの心情を深くつかんだ授業で子どもたちが、みんなで分かって良かった、楽しかった、嬉しかったという授業をつくらう。指導要領がわるいノといいつつ、やっていることはいわれた通りの詰め込み授業ではおかしい」といっています。

以下は高橋さんの学年通信からの抜粋です。一年生のこどもたちの様子がよくわかります。

『ポケモン』と

つきあう

一年生の子どもたちも、けっこう「ポケモン」のキャラクターを集めて持っている子が目立ちます。「たのしいノート」というのがあって、休み時間とか、授業の作業がおわると、書いてある時があります。入学以来、ずっと、小さいモンスターを登場させて、ノートに書いて対話をしたり、その絵を次々に書きこんでいます。それも、他の絵とちがってとてもいいねいで、気持ちよこめて書いています。

図工の時間の絵は、人間の手、足、体などがあって、どうも苦手であっても、「ポケモン」のつきあいは、ぜんぜんちがいます。小さなカードを時々もってくる。ことがあります、つい授業中、その机の上に出すときは、「大切なも

のだったらしまっておきなさい。」とか「家に大事にしまっておきなさい」と言いますが、よく考えてみると、子どもの感情からいうと、だいたい距離のある話だなあと、今思ってしまうのです。

どうも私たちには、かつてのテレビの主人公とかを好んでかくという状態から、「ポケモン」を友だちのように生きている相手としてつきあっているのではないかと思えてくることがあるのです。

先には「たまごっちブーム」があった人気がとうとうしました。それも、中学生・高校生が主流でした。どうも、一般的ではあるけれど、子どもたちは、人間同士のトラブルをきらい、このキャラクターと一しよに冒險したり、育ちあったり、いっしょに戦う戦友のように思っているふしがあるかえます。

自分が手がけているかぎり絶対、自分を裏切らないし、現実の中でつらい思いをして、裏切ったり裏切られたりすることよりは、ポケモンを少なくとも信頼できる友だちみたいに思ってしまったている子が何人かはいるような気がします。

こういう子が、ふえつつある中の授業です。私のどういう授業が、その子の心の中に入りこみ、その中で冒險し、その中で友情を深めあえるのか、課題なかもしれません。みなさんのご意見をおまちしています。

学校通信「にこにこどんどん」

No.70（江南小一年生）



くり返して読みきかせの大切さ—
のことを書いてきたけど

今日は、子どものふしぎな姿をかいてみましょう。絵本の読みきかせを子どもに時々しますが、読みはじめると必ず、下をむく子がいるのです、下をむいてではいたずらするか、他のことに興ずるということでもなさそうです。

そんな子にあとで「あなたは、この話きいていなかったの。」ときくと、ちょっと意外というような顔で否定します。

どうも、下をむいて聞いている子は一人・二人ではなく何人か目立ちます。どうしてかなあと思っていたところ、市内の図書館で読みきかせをしている司書の方にもきいてみました。同様にそういう子が目立つそうです。

東京子ども図書館の松岡京子さん

がある本に書いていたところを思いおこしましたよ。それは、いまの子どもたちは、生まれていろいろ沢山の音をききすぎて成長してきていると、いうのです。たしかにおもしろいおこししてみれば、テレビ、ステレオ、CD、ファミコンゲームボーイなど様々な音をきいて今日に至っているわけで、そういう場合、読みきかせの声も、様々な音の一種として子どもたちはとらえるようです。あまり、様々な音(雑音)きいてきた子は、読みきかせの声も雑音の一部くらいに受けとめて、心理的にさけていこうとする例らしいのです。

もし、そうだとしたら、子どもに快い音の環境を用意するのは大人の責務ですよ。さて、今日の読みきかせのときはどんなかな。

読書のかつどう

6 / 23 ~ 6 / 27 読書週間

- (1) おはなしの絵のコンクール
- (2) 一日3冊の貸しだし
- (3) 読書郵便

この3つのことを一年生も楽しくすすめています。

(1)のはなしの絵も人気があって、子どもは、かいてみたいという子が各クラス何人もいます。一組さんなどは、もうすでにみんなが書いています。(3)の読書ゆうびんは、ハガキで自分の好きな本のことを、これにかいてころある人にあげることになります。クラスの友だちでもよし、他学年の子どもでもいいのです。

一ねん二くみさとうまいこさま
一ねん一くみ あべゆき
題 ちいさなきいろいかさ
きゅうに かさがおおきくなった。
ちいさくんだり、しておもしろい
かさになりました。

学級通信「にこにこ
どんどん」No.50

子どもの発達の課題を明らかにして

― 授 業 寸 景 ―

Sちゃんという障害児が、私の学級にいます。私と目があわず、できないという自分の頭をガンガンたたいてどなりちらします。けど、この「わかんない」をこの子の発達課題の要件としてとらえます。

一年生ですから、文字をじっくり教えます。「ん」の文字を教えるとき、父母が私に提供してくれたギンナンを使うことにしました。一人二個ずつ配り、ギンナンの研究を始めました。「せんせい、これ種ですかあ。でっかいね」「たねなら芽がでるところあるんじゃないの」「これ料理に使うんでしょう。たべたーい」「ギンナンで、ん」が2つあるよ」「そうだ、きょうは「ん」のべんきょうでしよう」「話は続きます。「はい、そうです。

ギンナンっていくつの音でできていますか」「・・・」「4つです」「きょうはギンナンという文字のべんきょうをします」「はい、はい、せんせい、ん」で文字知っているよ。ぼくかけるよ」「そうか、江南小の「ん」はむずかしいぞ」と言ってお板に書かせます。

そこで初めて正確な文字の書き方を教えます。そして、「ん」で構成する単語がしです。「はんこ」のはつげんで、すぐ私のハンコを見せてノートにハンコをおしてあげます。「きょうは宿題をだしますよ。うちにかえったら、ギンナンを食べてみてください。そしてそのあじとか、おいとか、あした先生に教えてね」「はい」というわけです。

例のSちゃんは次の日、私においてみ(作文)をくれました。

「ぎんなんのぎんなんだんごたべました。あまかったよ」

Sちゃんは、二個のギンナンを串かつのくしでさして、だんごのようにして焼いて食べたんですって。「あまかった」と言っています。

Sちゃんは私とよく目があうようになり、集中度は高まり、どんどん自分の体を通した作文も書いてくれるようになりました。

Sちゃんが育つことは、クラスのみんなが育つことです。Sちゃんが居ごこちのいい学校は、みんなが居ごこちのいい学校です。学校・地域・家庭が協和音を奏でることが、今ほど求められている時はありません。